

「外科疾患ケーススタディ 59 例の PO 研修」

戸部隆吉
水戸廸郎 編集
高田忠敬

大先輩の方々が企画・執筆された著書の書評など私の任ではないが、ご指名ということなので、3 感想を述べたい。

医学は日新月异であり、これに医師が追従してゆくためには、たゆまぬ努力が必要である。また、医学を進歩させている側としてはこれを普及させるための努力をする義務と責任があると思う。医師はこれまで、これを専門書、雑誌などに頼るばかりではなかった。しかし American College of Surgeon では、多くの方々がご存じかと思うが、以前から Surgical Education and Self Assessment Program (SESAP) があって、一般外科領域における自己の assessment を自分自身で行うことができるようになっていた。これによって広く進歩していく医学を身につけることができ、その解答が返送されることにより、採点され、その個人が全体のどの位置にあるかもわかり、今後の努力の指針ともなっ

ている。

本書は、序に示されているごとく“一般外科における患者の持っている問題を正しく探し出し、分析整理してこれを解決していくための能力を養い、かつ高めることができる”ように企画されている。したがって、いま私が述べてきたところと本書の目的が必ずしも同じではないようにも思えるが、到達するところは同じである。

ただ、通り一遍にみると、医師国家試験問題に類似したところも少なくなく、そのようなことにも利用されるのかとも感じられた。しかし、中にはレベルの高い問題もあり、一概にはいえないし、この2つの目標の間には大きな相違がある。いずれにしても、1つの症例を通して新しい知識を得ることをめざした著書はあまり類がなく、このような著書が出版されたことはご同慶の至りである。今後これを機に、本書に類似したものが出版されることが期

待される。

症例を中心としたアセスメントの問題を作製することが意外と難しいものであることは、医師国家試験問題の作成などを通して知ったところである。本書を通読してみると、いずれも問題がよく練り上げられており、執筆陣のご苦勞が偲ばれる。ただ、問題とその解答が同じ見開きの中にあるものがあり、読者側としては使いづらいと思う。最終頁にまとめるなどの必要があろう。

設問から解答に至る思考過程はいくつかの段階を踏まなければならない。その段階の数によって難易度が増す。主症状と経過検査成績などからある疾患を想定して、行うべき処置、確定診断のための検査、疾患名を質問するのが一般的な形式である。したがって、解答の正否が同じ見開きの頁にあっては都合がよい。

しかし、本書が日常研修の不備を補うのに貢献するところは大きく、臨床能力を高めるうえで役立つものと考え、本書が広く利用されることを期待してやまない。

(北海道大学教授・第1外科)
内野 純一

● B5 332 頁 図 43 写真 184
原色図 12 1991 年 定価 7,004
円(税込) 300 円

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)